

み つか  
御使い

ANGELS

by J. B. Currie



J. B. カリー著

# 御使い

聖書にある重大な題目

J. B. カリー著

伝道出版社

東京

# ANGELS

A Short Biblical Study

by

J. B. Currie

Evangelical Publishing Deport

TOKYO

## 目次

はじめに 6

第一章 御使いたちの身分 11

御使いたちのすぐれた名前

ケルビム

セラフイム

セラフイムの特徴

そのほかの名称

第二章 御使いたちの威厳 31

受肉する前、主は御使いと同じ立場をとってご自分をあらわされた

御使いは神の聖なる御座と結ばれている

御使いは神の権威ある代理人である

第三章 御使いたちの訓練(上) 41

キリストは御使いたちに見られた

天にある支配と権威とに對して、教会を通して、神の豊かな知恵が示された  
それも御使いたちのために

御使いたちの前に

第四章 御使いたちの訓練(下) 53

罪を犯した御使いたち

第五章 御使いたちの務め 60

第六章 悪霊 68

悪霊の身分

悪霊の活動

悪霊の目的

悪霊の運命

第七章 創世記六章の「神の子ら」 77

二つの解釈

「神の子ら」は御使いか

「神の子ら」を御使いだとする教えに対する反論

前後関係による解釈

このことに関係のあるみことば

## はじめに

聖書における「御使い」という題目は、興味深くかつ有益なものです。しかし、残念なことに、御使いのことはなおざりにされ、あまり学ばれていません。学びの中でふれられることはありますが、御使いについての連続的な、系統だった学びはめったにありません。御使いについてよく学ぶと、聖書の中にある神の啓示がどれほど広大なものであるかがわかりますが、聖書をくわしく調べたいと思っても、この崇高な存在について説明している書物は無きに等しい状態です。彼らはきわめて崇高なものとして創造されました。神の創造された自然界においては、人がその冠であり、神は人を心に留められたのですが、その人でさえ、「御使いよりも、いくらか、低いもの」とされました（詩篇八・5。ヘブル二・7の欄外参照）。

コンコードダンスなどを調べると、「御使い」という単語は、聖書の中に二七五回も出てくることがわかります。「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です」（Ⅱテモテ三・16）と信じていながら、聖霊がそんなにたくさん語っておられることをなおざりにするなら、私たちは霊的な損失を被らざるをえないことを知っておくべきです。

では、なぜ、この重大な題目を無視してしまうのでしょうか。ずっと昔から、御使いについての考えにはさまざまな迷信があり、それがもたくなって御使いのグロテスクな肖像が生まれました。そのため、知性を誇る未信者たちは、そのすべてを、中世的な無知から来るものとして一掃してしまったのです。

さらに、聖書はキリストを中心にして書かれた書物です。神ご自身の啓示であるこの聖書を讀んだり考えたりするとき、信者はいつも、旧新約聖書全巻に示されているキリストを求めているので、御使いのような、神でも人間でもない中間的なものは大して重要でないと思うのかもしれませんが。御使いの存在を認めていない信者はいませんが、その多くが、地上で生活している今は、彼らとはあまり関係がないと考えています。神のみことばをよく調べたうえでなお、御使いは今の時代とはなんの関係もないと考えている人もいるのです。しかし、この神の威厳あるしもべたちについては、旧約よりも新約のほうに、より多くの言及があります。この研究は徹底的なものではありませんが、これを通して、御使いの働きは私たちの日々の生活と関係があるだけでなく、たいへん広範なものであることが明らかになるでしょう。

私たちの時代は聖霊の時代です。神がキリストにあつて私たちに与えてくださった霊の祝福はすべて、聖霊の力によって私たちのものとされました。御使いたちの務めが、今の時代の信



者にとってどことなく余分なもののように見えるのは、そのせいだと思います。言うまでもなく、聖霊の幸いな働きと特権を侵犯しないように注意することは正しいことです。ただし、それも度が過ぎると、ルカの福音書一章で、ザカリヤとマリヤに、ヨハネと主イエスの誕生を告げ知らせたのが聖霊ではなくガブリエルという御使いであったことを見て、戸惑うことになります。マタイの福音書一章でも、「主の御使い」がヨセフにあらわれて同じようなことを告げました。一方、エリサベツは聖霊に満たされて、マリヤが「私の主の母」であることを知ったのです（ルカー・41〜43）。私たちはこれらのことをよく考えなければなりません。

聖書は根本的に「あがないの歴史の書」です。ですから御使いは、神のあがないに関係している事らにおいてのみ、その姿をあらわしています。御使いについての神話の類は世界のどこにもありますが、それらはほとんど、人間の不敬虔な想像に基づいたものです。しかし、多くの言及があるにもかかわらず、啓示の書である聖書は、御使いについてわずかしか語っていないともいえます。御使いの最初の創造、彼らの現在の務め、神の永遠のご計画による彼らの未来について、聖書はほんの少し知らせているだけです。人間はそういう尊いもの（御使い）を拝む傾向がありますから（黙示録二二・8）、神は、永遠にわたるこの偉大な題目について、ほんの少し、窓をあけて見せてくださったのです。

この題目を順序よく考え、聖書に書いてある真理のさまざまな様相を手際よく学ぶために、次のように分類してみましよう。

- 一、御使いたちの身分
- 二、御使いたちの威厳
- 三、御使いたちの訓練（上）
- 四、御使いたちの訓練（下）
- 五、御使いたちの務め
- 六、悪 霊
- 七、創世記六章の「神の子ら」